

# 福永光司蔵書目録

( 目 次 )

福永光司蔵書整理にあたって . . . . . 1 頁～12 頁

福永光司蔵書目録凡例

日本語の部、総計 6 5 4 6 冊 . . . . . 13 頁～180 頁  
附定期刊行物 190 種、3663 冊

中国語の部、総計 2 9 7 5 冊 . . . . . 181 頁～217 頁

漢籍の部、計 9 9 7 種 . . . . . 218 頁～238 頁  
附和刻書線装本、計 116 種

洋書の部、計 2 1 4 種 . . . . . 239 頁～243 頁

補遺の部 . . . . . 244 頁～247 頁

# 福永光司 蔵書目録

2008

大分県中津市教育委員会

# 福永光司蔵書目録凡例

- 1、 この目録は京都大学名誉教授福永光司先生旧蔵の書籍目録である。
- 2、 蔵書目録は「日本語の部」「中国語の部」「漢籍の部」(含和刻線装本)「洋書の部」からなる。
- 3、 「日本語の部」の分類は、基本的に日本十進分類法に準拠しているが、福永光司の研究動向が伺えるように分類によっては関連書籍をまとめている部分がある。
- 4、 新書、文庫本の目録は、「日本語の部」の最後に配列している。
- 5、 「中国語の部」の分類は、学問分野によって分類している。
- 6、 「日本語の部」「中国語の部」の蔵書目録は、書名、著者名、出版社、出版年代、サイズ(cm)の順に記している。
- 7、 「漢籍の部」の分類は、「経・史・子・集・叢書」による。目録の配列順は「京都大学人文科学研究所漢籍分類目録」に準じている。
- 8、 福永光司先生は漢籍、活字本とも多数のコピー本を作成している。コピー本の中で装丁されて帙に納められているもの、所蔵していないため他図書館蔵書からコピーし、装丁本としているものは、福永先生の研究内容を理解するために目録に入れている。それらの書は「福永コピー装丁本」と注記している。しかし福永先生自身の研究用に、既に所蔵している書の一部をコピー装丁しているものについては目録に入れなかったものがある。
- 9、 目録の中に「福永光司手づくり索引・目録」「特殊コレクション福永光司著作文庫」(著書、編著、学術論文掲載雑誌、講演、対談、その他掲載雑誌)を収録し、福永光司先生の研究業績が一覧できるようにしている。この部分の作成は「福永光司先生略歴及び主要論著目録」(福永光司先生を偲ぶ会編 2002年3月)を基礎にして行い、更に目録作り作業の過程で新たに発見したものを多数収録している。従ってこの部分を見ることによって福永光司先生の仕事の全体が伺えるようになっている。この作業は鄧紅が行った。
- 10、 目録の作成は、神戸輝夫(大分大学名誉教授)、鄧紅(大分県立芸術文化短期大学助教授)、秦みつよ(大分県立芸術文化短期大学図書館司書)が中心となり、鄧紅ゼミの学生徳丸吉枝、石井美登里、柴田明香、楯原真琴、梶原舞子、「歴史と自然を学ぶ会」会員平出淑江の助力を得て行われた。
- 11、 福永光司蔵書目録の調整・印刷・製本・発刊は、中津市教育委員会が行った。

# 福永光司蔵書整理にあたって

## 1、福永光司その人、その仕事

福永 光司（ふくなが みつじ、1918年～2001年12月20日）先生は、日本の中国思想史の研究者、とりわけ道教思想の研究の第一人者といわれる人物である。

福永光司先生の略歴は次のようである。

- |             |                                                                                            |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1918年       | 大分県下毛郡鶴居村（現中津市）大字高瀬農業福永万吉、コヲ夫妻の長男として生まれる                                                   |
| 1936年       | 大分県立中津中学校卒業（現大分県立中津南高等学校）                                                                  |
| 1940年       | 広島高等師範学校（現広島大学）文科第一部卒業                                                                     |
| 1942年       | 京都帝国大学（現京都大学）文学部哲学科（支那哲学史専攻）卒業                                                             |
| 10月         | 京都帝国大学大学院入学<br>京都帝国大学大学院休学<br>現役兵として野砲兵第六聯隊補充隊（熊本）に入隊                                      |
| 1944年       | 陸軍砲兵少尉                                                                                     |
| 1945年       | 陸軍砲兵中尉                                                                                     |
| 1947年1月4日   | 中華民団広東省より復員                                                                                |
| 2月14日       | 京都大学大学院に復学                                                                                 |
| 3月31日       | 京都大学大助学院退学当方<br>文化研究所（京都）助手                                                                |
| 1948年       | 京都大学大学院特別研究生（第1期、至1950年3月31日）                                                              |
| 1950年       | 京都大学大学院特別研究生（第2期、至1953年3月31日）                                                              |
| 1950年10月16日 | 百留毅、初子の長女、啓子と結婚                                                                            |
| 1951年       | 大阪府立北野高等学校講師                                                                               |
| 1951年       | 長女 桂子誕生                                                                                    |
| 1952年       | 大阪府立北野高等学校教諭                                                                               |
| 1955年       | 愛知学芸大学（現愛知教育大学）講師                                                                          |
| 1955年       | 長男 拙誕生                                                                                     |
| 1958年       | 愛知学芸大学助教授                                                                                  |
| 1961年       | 京都大学人文科学研究所助教授に配置換                                                                         |
| 1964年4月1日   | 京都大学大学院文学研究科担当                                                                             |
| 1969年11月1日  | 京都大学大学院文学研究科担当を免ずる                                                                         |
| 1970年4月1日   | 京都大学大学院文学研究科担当                                                                             |
| 6月16日       | 京都大学人文科学研究所教授                                                                              |
| 1974年4月1日   | 東京大学文学部教授に配置換 中国哲学中国文学第三講座担任<br>京都大学人文科学研究所教授に併任<br>京都大学大学院文学研究科担当を免ずる<br>東京大学大学院人文科学研究科担当 |

- |             |                                             |
|-------------|---------------------------------------------|
| 1979年4月1日   | 東京大学文学部を定年退職<br>京都大学人文科学研究所教授に配置換           |
| 1980年4月1日   | 京都大学人文科学研究所所長<br>京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター長を併任 |
| 1982年4月1日   | 京都大学人文科学研究所を定年退職<br>関西大学文学部教授               |
| 1986年3月31日  | 関西大学文学部を退職                                  |
| 1986年4月1日   | 北九州大学外国語学部教授                                |
| 1989年3月31日  | 北九州大学外国語学部を退職                               |
| 2001年12月20日 | 逝去 享年83歳                                    |

## 福永光司の仕事

福永光司先生の主な著作等は次に掲げるとおりである。

この著作等目録は「福永光司先生略歴及び主要論著目録」（福永光司先生を偲ぶ会 2002年3月）を基礎に、鄧紅がこのたびの蔵書整理作業において雑誌、新聞、抜き刷り等から新たに発見した多数の著作、講演、対談等を追加加筆したものである。今回作成の「福永光司蔵書目録」にも「福永手づくり索引・目録」「特殊コレクション福永光司著作文庫；著書・編著・学術論文掲載雑誌・講演、対談、その他掲載雑誌」を収録しているが、この両者の資料を対比してみるとにより福永光司の幅広い学問研究業績の全貌をつかむことができるものになっている。

## 著書類

- 1、『莊子』 朝日新聞社（中国古典選）、1956年2月
- 2、『莊子—古代中国の実存主義』中央公論社（中公新書、36）、1964年3月  
〔中国語訳〕陳冠学氏訳 民国58年、台北、三民書局
- 3、『莊子』（内篇・外篇・雑篇）朝日新聞社（新訂中国古典選、7-9）1966年4月・10月・67年9月  
同（内篇・外篇・雑篇）朝日新聞社（朝日文庫 中国古典選、12-17）、1978年12月
- 4、『老子』朝日新聞社（新訂中国古典選、6）、1968年10月  
同、朝日新聞社（朝日文庫 中国古典選、10-2）、1978年9・10月  
同、朝日新聞社（朝日選書、1009 中国古典選）、1997年1月
- 5、『中国思想について』富山県教育委員会（精神開発叢書五）1969年3月
- 6、『芸術論集』朝日新聞社（中国文明選、14）1971年9月
- 7、『列子』平凡社（中国古典文学大系、4）1973年6月  
同、平凡社（東洋文庫、533、534）1991年5月
- 8、『道教と古代の天皇制—日本古代史・新考』（共著）徳間書店、1978年5月
- 9、『大塩中斎校注』岩波書店（日本思想大系、46）、1980年5月

- 10、『道教と日本文化』人文書院、1982年3月
- 11、『道教と日本思想』徳間書店、1985年4月
- 12、『道教と古代日本』人文書院、1987年2月
- 13、『道教思想史研究』岩波書店、1987年9月
- 14、『日本の道教遺跡』（千田稔氏、高棉撤氏等共著）朝日新聞社、1987年12月
- 15、『中国の哲学・宗教・芸術』人文書院、1988年9月
- 16、『老荘に学ぶ人間学—ビジネスマンの道（タオ）の哲学』 富士通経営研修所、1992年12月
- 17、『「馬」の文化と「船」の文化！古代日本と中国文化』人文書院、1996年1月
- 18、『タオイズムの風—アジアの精神世界』人文書院、1997年5月
- 19、『混沌からの出発—道教に学ぶ人間学 五木寛之』致知出版社、1997年5月  
同、中央公論新社、1999年3月（中公文庫、い123-4）
- 20、『宗教を考える』（八木誠一氏・ひろさちや氏共著）リブリオ出版（いきいきトーク知識の泉、著名人が語る（考えるヒント）5）1997年11月

## 編著

- 『老子索引』 京都大学人文科学研究所、1950年10月
- 『明佛論索引』 京都大学人文科学研究所、1963年3月
- 『理惑論索引』 京都大学人文科学研究所、1966年3月
- 『思想史』（中国文化叢書、3） 共編 大修館書店、1967年10月
- 『思想概論』（中国文化叢書、2） 共著 大修館書店、1968年4月
- 『五経・論語』（吉川幸次郎共編）筑摩書房、1970年9月（世界文学全集3）
- 『気思想—中国における自然観と人間観の展開』（小野沢精一、山井湧氏共著）  
東京大学出版会、1978年3月
- 〔中国語訳〕『気思想—中国自然観と人的観念的發展』 李慶訳 上海人民出版社、
- 『最澄・空海』福永光司責任編集 中央公論社（日本の名著、3）、1977年5月  
同、中央公論社（中公バックス 日本の名著、3）、1983年6月
- 『道教と古代の天皇制』（上田正昭氏・上山春平氏共編）徳間書店、1978年5月
- 『世界伝記大事典—日本・朝鮮・中国編』（共編）ほるぷ出版、1978年7月
- 『中国中世の宗教と文化』 京都大学人文科学研究所、1982年3月
- 『般若思想』（共編）春秋社（講座・大乘佛教、2）、1983年
- 『道教と東アジア—中国・朝鮮・日本』 人文書院、1989年4月
- 『中国宗教思想』（共編）岩波書店（岩波講座東洋思想、第14巻）1990年1月
- 『中国宗教思想』（共編）岩波書店（岩波講座東洋思想、第13巻）1990年4月

## 学術論文

- 「莊周の遊に就て」 『支那学』(2-3・4合併号)、1946年11月
- 「韓非子の人間論」 『東洋の社会と文化』(1)、1950年11月
- 「司馬遷の人間観—主として利・義・天について」 『東洋の社会と文化』(3)、1953年7月
- 「王充の思想について 王充と老荘思想」 『東洋史研究』(2、6)、1954年3月
- 「郭象の莊子解釈1・2」 『哲学研究』(424・425)、1954年6・7月
- 「対禪説の形成1・2」 『東方宗教』(6・7)、1954年2月・55年2月
- 「僧肇と老荘思想」 法蔵館『肇論研』(塚本善隆編)、1955年9月
- 「支遁と其の周国—東晋の老荘思想」 『佛教史学』(5-2)、1956年3月
- 「何晏の立場 その学問と政治理念」 『愛知学芸大学研究報告』(7)、1958年3月
- 「阮籍における憧れと慰め」 『東方学報(京都)』(28)、1958年3月
- 「王羲之の思想と生活」 『愛知学芸大学研究報告』(9)、1960年3月
- 『謝靈運の思想』 『東方宗教』(13・14合併号)、1960年7月
- 「慧達文集(『慧遠研究』遺文篇)」 編訳注(一部共訳注) 創文社、1960年2月
- 「郝超の仏教思想—東晋仏教の一性格」 『塚本博士頌寿記念儒教史学論文集』法蔵館、1961年2月
- 「孫綽の思想—東晋における三教交渉の一形態」 『愛知学芸大学研究報告』(10)、1961年3月
- 「慧遠と老荘思想」 『慧遠研究』研究篇(木村英一編)、創文社、1963年2月
- 「嵇康における自我の問題—嵇康の生活と思想」 『東方学報(京都)』(32)、1962年3月
- 「中国の書芸術思想」 『書学』(13-8)、1962年8月
- 「陶淵明の眞について—淵明の思想とその周辺」 『東方学報(京都)』(33)、1963年3月
- 「世説新語」 『中国古小説集』筑摩書店(世界文学大系)、1964年11月
- 「郭象の『莊子注』と向秀の『莊子注』—郭象窃盜説についての疑問」  
『東方学報(京都)』(36)、1964年10月
- 「無為を説く人々『春秋戦国と古代インド』」 『思想の歴史』(2)、平凡社 1965年5月
- 「中国における天地崩壊の思想」 『吉川博士退休記念論文集』筑摩書房、1968年3月
- 「仏教信仰の要義(郝超「奉法要」訳)」 塚本善隆『中国儒教通史』第一卷、鈴木学術財団、1968年3月
- 「(中国哲学における)認識論」 『思想概論』大修館書店(中国文化叢書、2)、1968年4月
- 「竹林の七賢—大唐の繁栄」 世界文化社(世界歴史シリーズ、7)、1968年9月
- 「善の無心と莊子の無心」 『善の本質と人間の眞理』(久松眞一・西谷啓治編) 創文社、1969年8月  
[英評] L・バービッツ氏訳、ZINBEN12、京都大学人文科学研究所、1969年12月
- 「大人賦の思想的系譜—辞賦の文筆と老荘の哲学」 『東方学報(京都)』(41)、1970年4月
- 「易経(解釈・抄訳注)」 『五経・論語』筑摩書房、1970年9月
- 「道教における鏡と劍—その思想の源流」 『東方学報(京都)』(45)、1973年9月
- 「現代中国における文化財保護」 『文化財宝』(創刊号)、1974年5月  
『文化財の知識』京都府文化財保護基金、1975年3月、に転載
- 「仏教と道教・儒教」 『仏教と民族宗教との習合現象について』  
仏教美術研究上野記念財団助成研究会、1975年3月
- 「昊天上帝と天皇大帝と元始天尊—儒教の最高神と道教の最高神」 『中哲文学会報』(2)、1976年6月
- 「通極論索引」 『東方学報(京都)』(49)、1977年2月

『三教指帰』訳注 『最澄・空海』中央公論社、1977年5月

「空海における漢文の学—『三教指帰』の成立をめぐる—」『最澄・空海』中央公論社、1977年5月

「三浦梅園と『莊子』と陶弘景」『国語の研究』(10)、大分大学国語国文学会、1977年5月

「墨子の思想と道教—中国古代思想における有神論の系譜」

吉岡博士還暦記念『道教研究論集』国書刊行会、1977年5月

「天皇と紫宮と真人—中国古代の神道」『思想』岩波書店、1977年7月

「道家の気論『淮南子』の気」『気思想』東京大学出版会、1978年3月

「儒仏道三教交渉における『気』の概念」『気思想』東京大草出版会、1978年3月

「道教における天神の降臨授誠—その思想と信仰の源流」

福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所、1982年

「鬼道と神道と眞道と聖道—道教の思想史的研究」『思想』(675)、岩波書店、1980年9月

「道教とは何か」『思想』(6)、1982年6月

[中国語訳] 何謂道教 朱地利氏辞 世界宗教資料、一、一九八四年二月

「津田左右吉博士と道教—福井文雅氏の書評『道教と日本文化』に答えて1」『東方宗教』(61)、1983年5月

「中国の芸術哲学」講座美学『美学の歴史』東京大学出版会、1984年5月

「莊子における「眞」の哲学—中国儒教との関連において」『大地』(学習録3)、1984年6月

「記紀と道教」『国文学』(29巻11号)、1984年9月

『古事記』山「天地開闢」神話 『ユリイカ』(日本の神話)、1985年1月

「道教について—学生諸君の「道教とは何か」の問いに答える」『関西大学中国文学会紀要』(9)、1985年3月

「中国の自然観」『自然とコスモス』岩波書店(新・岩波講座、哲学五)、1985年7月

「古代信仰と道教」『神と人—古代信仰の源流—』(朝日カルチャーブックス)大阪書籍、1986年

「東洋文化における自然—習俗と宗教」『宗教と文化』(共著山折哲雄氏)(大谷大学)(2)、1988年3月

「仏教與道教—以漢訳(備説無量寿經)為例」『世界宗教研究』、1988年3月

「道教と仏教—神学教義の相互影響」『東洋学術研究』、27、1988年11月

[中国語訳] 道教与儒教—神学教義的互相影響— 楊曾文訳 世界宗教資料、1、1989年3月

「儒教漢語と中国古典文化」『北九州大学大学院紀要』(創刊号)、1988年3月

『おもろ』の創世神話と道教神学 『思想』(七七五)、岩波書店1989年1月

「史書にみる徐福の出航」『弥生の使者 徐福—稲作渡来と有明のみち—』同刊行会、1989年3月

「太白山和道教」(朱越利訳) 『中国道教』、1989年代2期、1989年

「呉越文化と古代日本」『稲—その源流への道』東アジア文化交流史研究会、1990年5月

「徐福と吉野ケ里遺跡の墳丘墓」『徐福伝説を探る』小学館、1990年7月

「元氣と病気」『中国古代の生命の哲学思想』(4月号)、1992年4月

[中国語訳] 道教生命哲学及其在日本的影響 朱越利訳 哲学研究、4、1994年4月

「倭人と魅入」『倭と越—日本文化の原郷を探る』東アジア文化交流史研究会、1993年5月

「常世と神仙」『弥生の王国—東アジアの海から—』東アジア文化交流史研究会、1993年5月

「神巻・楼閣・渦巻文 上・下」『東アジアの古代文化』(76・77号)、1993年夏号・秋号

『倭人』と『倭国』と『倭奴国』 『倭人伝の道—久里汲水古墳と邪馬台国—』

東アジア文化交流史研究会、1994年10月、

- 『墓』の思想信仰 『福岡からアジアへーかめ棺の源流を探る文明のクロスロードふくおか』、  
西日本新聞社、1995年2月
- 「文献から見た徐福の時代ー徐福と金立神社と有明海」 『弥生の夜明けー徐福学への発走ー』  
東アジア文化交流振興協会、1995年5月
- 「唐津の地名とその思想信仰」『海の王国ー東アジアの中の唐津ー』  
東アジア文化交流史研究会、1995年9月
- 「古代日本と中国文化ー『古事記』神話の「生」と「死」を中心に」『国際文化研究所論叢』(11)、  
2000年7月
- 「道教と印刷文化」『印刷博物誌』凸版印刷、2001年6月

## 書評・解説・月報・附録

- 〔書評〕根本誠著『専政社会における抵抗精神』 東洋史研究、12-4、1953年6月  
莊子と酒 中国古典選『莊子』附録、1956年2月
- 〔書評〕王謠著『李白』林庚著『詩人李白』武部利男著『李白小伝』 中国文学報、4、1956年4月
- 〔書評〕常石茂著『新・論語物語』 京都新聞、1958年3月10日
- 〔書評〕斯波六郎著『中国文筆における孤独感』中国文学報、9、1958年10月
- 〔書評〕大浜皓著『中国古代の論理』 図書新聞、1960年1月23日
- 〔書評〕D・ホルツマン著『嵇康の生涯と思想』中国文学報、13、1960年10月
- 〔書評〕木村英一著『老子の新研究』 モニュメンタ・セリカ、1961年度
- 〔書評〕金谷治著『秦漢思想史研究』 東方宗教、17、1961年8月  
「何晏」、「金丹道」、「嵇康」、「阮籍」、「孝」、「孝経」、「黄老」、「竹林の七賢」、「李白」、「老荘思」  
『論語集解』、『世界大百科事典』 平凡社、1965年8月
- 「無限大」の効用 新訂中国古典選『莊子』内篇、附録、1966年4月
- 寿陵の余子 新訂中国古典選『莊子』外篇、附録、1966年〇月
- 同じであることの認識 新訂中国古典選『莊子』雑篇、附録、1967年9月
- 老子型と莊子型 新訂中国古典選『老子』附録、1968年10月
- 吉川先生の「博」 『吉川幸次郎全集』2、月報、筑摩書房、1968年12月
- 仏典の漢詩 『仏教の思想』6、月報、角川書店、1969年1月  
『老子』、『莊子』、『論語』文献解題 『哲学のすすめ』附録、筑摩書房、1969年2月
- 〔書評〕R・H・バン・グリーク著『嵇康と琴賦』 ジャパン・クォーターリー、17-2、1970年5月
- 益軒の養生訓と梅園の善生訓ー『大疑録』朱子学批判によせてー 「日本思想体系」25、月報、岩波書店、  
1970年10月
- 『莊子』のなかの動物たち 『宮地伝三郎動物記』2、月報、筑摩書房、1973年1月
- 『浄土論注総索引』 はしがき 東本願寺宗教学研究、1972年9月
- 寒山詩と「白雲」 『世界古典文筆全集』36、月報、筑摩書房、1974年2月
- 老荘思想と日本人 『中国の歴史』 「月報、講談社、1974年6月
- 中江藤樹と神道 『日本思想体系』19、月報、岩波書店、1974年7月
- 〔書評〕諸橋轍次・安岡正篤監修 『朱子学入門』週間講書人、1974年9月13日

深谷周道訳注『顔真卿』 はしがき 風媒社、1974年12月  
 孫子の兵法と「道」の哲学 「全釈漢文大系」22、月報、集英社、1975年8月  
 〔書評〕中村璋八『五行大義の基礎的研究』東方宗教、48、1975年10月  
 『礼記』とわたくし 『全釈漢文大系』12、月報、集英社、1976年6月  
 積彦琮「通極論」解題 東方学報（京都）、49、1977年2月  
 〔書評〕酒井忠夫編『道教の総合的研究』 東方宗教、50、1977年11月  
 〔推薦文〕中国学の研究者として 『法華経一字索引』の刊行を喜ぶ 東洋哲学研究所、1977年11月  
 自然と因果—老荘道教と中国仏教 「世界の名著」4、附録、中央公論社、中公ボックス、1978年7月  
 武内先生と諸子学 『武内義雄全集』6、解説、角川書店、1978年9月  
 儒医としての三浦梅園 「一元気」の哲学と道教医学 創文、11月号、1978年10月  
 〔推薦文〕藤堂明保編『学研漢和大字典』 学習研究社、1978年2月  
 蘇秦と鬼谷先生と太公陰符 「全釈漢文大系」25、月報、集英社、1979年3月

## 講演・対談他

- 〔対談筆録〕中国古典をいかに読むか—五経・四書を中心に— 『新訂中国古典選』別巻、朝日新聞社、1969年4月  
 〔対談筆録〕老荘と道教—人生観— 『日本と東洋文化』新潮社、1969年7月  
 〔対談筆録〕哲学における東洋と西洋 『哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1972年2月  
 〔講演筆録〕老荘の思想 朝日ゼミナール、82、1972年2月  
 〔シンポジウム筆録〕深層文化論の視点 創造の世界、7、小学館、1972年7月  
 〔シンポジウム筆録〕日本人と宗教—欺異抄と本願寺教団 創造の世界、7、小学館、1972年7月  
 〔シンポジウム筆録〕律令体制と万葉集 創造の世界、8、小学館、1972年10月  
 〔シンポジウム筆録〕現代における死と宗教 創造の世界、8、小学館、1973年2月  
 〔シンポジウム筆録〕「老」の価値 創造の世界、10、小学館、1973年5月  
 〔シンポジウム筆録〕孤独な疎外者の願望 創造の世界、11、小学館、1973年7月  
 〔対談筆録〕「中国を考える」 「中国を歩く」 『中国紀行30日』朝日新聞社、1973年9月  
 〔講演要旨〕現代中国の仏教事情 中外日報、1973年11月18日  
 〔対談筆録〕仏教の遺産と課題 中央公論、5月号、1974年5月  
 〔対談筆録〕われわれにとって中国哲学とは何か— 『中国哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1975年1月  
 〔対談車線〕荘子の世界 湯川秀樹対談集『人間の発見』講談社、1976年1月  
 〔講演要旨〕中国哲学における欲望論 講演会要旨・一集、高崎哲学堂、1978年3月  
 〔講演要旨〕漢代における老子の祭祀 日本中国学会大会研究発表要旨、1976年10月  
 〔対談筆録〕秦漢古墳の発掘 展望、2-5、筑摩書房、1978年11月  
 〔対談筆録〕中国の政治・中国の古典 アジア・クォーターリー、九-二、1977年6月  
 〔講演要旨〕中国哲学における「中」の思想 講演会要旨、九集、高崎哲学堂、1978年9月  
 〔講演要旨〕鬼道と神道—日本古代と中国古代の宗教思想—宗教学論集、10、駒沢大学宗教学研究會、1980年12月

- [講演要旨] 日本文化と道教—従以天皇為思想信仰談起 『世界宗教研究』1982年第2期、1982年5月
- [講演筆録] 東洋文化における自然—習俗と宗教— 『宗教と文化』、2、大谷大学、1988年3月
- [講演筆録] 日本文化史上の豊前中津—豊前中津と中国古代文化 『三毛の文化』、10、1989年2月
- [講演筆録] 銅の文化の伝来と豊の国 『三毛の文化』、12、1989年10月
- [講演筆録] 豊前の国と中国古代宗教文化—八幡信仰のルーツは中国である— 『郷土田川』、33、1990年
- [シンポジウム筆録] 古代の日中交流と有明海 『徐福伝説を探る』小学館、1990年7月
- [講演筆録] 漁撈文化の伝来と海神信仰 『三毛の文化』、14、1990年12月
- [講演要旨] 元氣と病氣 中国古代の生命の哲学 『総合会誌』、日本医学会、1991年4月
- [野談筆録] 呉越と倭のこと 『呉越の風 筑紫の火』東アジア文化交流史研究会、1991年5月
- [対談筆録] 古代往来、倭と呉越 『古代テクノポリスと呉越』東アジア文化交流史研究会、1992年5月
- [講演筆録] 医療文化の伝来と豊の国 『三毛の文化』、16、1992年2月
- [講演筆録] ト古文化の伝来と豊の国 『三毛の文化』、18、1992年12月
- [講演筆録] 馬の文化と船の文化 『宮城経協会報』、1992年6月会報、1992年6月
- [講演要旨] 八幡の語の思想・信仰 謎の八幡神 (第一回豊の国古代文化シンポジウム)、1992年11月
- [講演要旨] 『天皇』とスメロギ』道教の日本的受入れ方 講演会「古代王権シリーズ3」、  
東アジアの古代文化を考える会、1992年12月
- [講演筆録] 生気の流れと壺 『日本経絡学会誌』、21号、1993年
- [野談筆録] —人生肯定の哲学「道教」に学ぶ 致知、1993年10月
- [講演要旨] 中国古代の生命の哲学 『21世紀の医療と漢方』、メディカルトリビューン社、1994年2月
- [講演筆録] 東の心西の心 国際高等研究所・開所記念講演—国際高等研究所、1994年8月
- [講演筆録] 豊の国と中国文化 創立20周年記念誌 中津中央ロータリークラブ、1995年
- [対談筆録] 明日香と道教 (季刊) 明日香風、16、1995年10月
- [対談筆録] 「蓮如」と「道教」 致知、1996年4月号
- [講演筆録] 禅と老荘の「道」の教 『「文明のクロスロード九州—仏教の源流をたずねて—」  
九州曹洞宗青年会・福岡曹洞宗青年会、1997年6月
- [対談筆録] トルストイと道教 致知、1998年5月号
- [講演要旨] 古代日本と中国文化 『古事記』神話の「生」と「死」を中心に—筑紫女学園大学・  
短期大学国際文化研究所論叢、11、2000年7月
- [対談筆録] —福永光司先生に聞く 国漢春秋、27、2001年3月

## その他

- 図書室の窓から—北野高校ライブラリーニュース、1953年2月10日
- 中国の現代文学について—愛知学芸大学新聞、1959年2月10日
- 輪扁の講書論 朝日出版月報、10、1959年10月
- 莊子 懐徳、31、1960年10月
- 中国哲学における時間論 金谷氏にこたえて— 極東書店書報、1、1961年1月
- 引き廻されの記—文芸春秋、8月号、1964年8月
- 日本人白書 戦後20年を迎えて京都新聞、1964年8月9日

活きた学問 『莊子』をてこにして—日本人、37、1967年6月  
無為自然 NHK ラジオ学校放送テキスト、1968年9月  
現代と莊子 NHK ラジオ学校放送テキスト、1969年9月  
莊子の哲学 精神開発室69年度紀要、富山教育委員会、1970年4月  
無用の用 精神開発室70年度紀要、富山教育委員会、1971年1月  
無用の用 人文、二号、京都大学人文科学研究所、1971年3月  
江戸期の老莊思想 図書、269、岩波書店、1972年1月  
老莊思想と現代 創造の世界、6、小学館、1972年4月  
歴史哲学としての老莊思想 創造の世界、6、小学館、1972年4月  
現代文明に警告する老莊の哲学 月刊エコノミスト、9月号、1973年9月  
古代中国人の死後の世界 週刊朝日、9月10日増刊号、1972年9月  
老莊と仏教 国語通信、一一一、東京書籍、1972年9月  
中国の今と古 朝日新聞、1973年5月14日  
革命烈士の墓 中国を旅行して—ちくま、52号、1973年8月  
時を待つ東洋の思想 日本経済新聞、1974年1月18日  
中国を旅行して 中国語、170、大修館書店、1974年3月  
神道と道教 京都新聞、1974年4月3日  
価値の相対化 『考える読書』毎日新聞社、1974年4月  
馬王堆漢墓の帛書 朝日新聞、1974年8月13日  
「茶道文化研究」の題字について 茶道文化研究、1974年8月  
愚公と智叟 中国語、—85号、大修館書店、1975年6月  
人間と自然 人間形成を考える 大坂工業会縮、1975年2月  
天帝のお召し 東京大学新聞、1976年10月4日  
堀本さんの思い出 堀本武男遺稿集—流花橋に死す、1977年2月  
「元気」の哲学 健康、1977年4月号、1977年4月  
書の技と道 出版ダイジェスト、1977年10月20日  
風に乗る仙人 エビステーメ、2月号、朝日新聞社、1978年2月  
中国古代の神道と日本の神々 創造の世界、26、小学館、1978年5月  
老子と老君 「道」の哲学と「黄老」の宗教、「人類の知的遺産」5、月報、講談社、1978年7月  
山上憶良と病気 奈良朝期の道教医学—健康、1979年1月号、1979年1月  
「木鷄」の哲学 木鷄、創刊号、太平洋公論社、1979年3月  
東洋の遊びの哲学 1・2・3・4 学遊、3—6・7・8・9、1989年6・7・8・9月  
道教と八幡大神 中外日報、1990年1月1日  
イズムは南からやって来た 古代日本人の思想信仰と江南文化、歴史群像、学習研究社、1990年7月  
「自分」という漢語 朝日新聞「心のページ」編『自分と出会う』朝日新聞社、1990年2月  
老莊を読む—老子— さわやかくらぶ、1990年11月号、NHK  
老莊を読む—莊子— さわやかくらぶ、1990年12月号、NHK  
「古代九州の国際交流」『古代合衆国・九州・アジアと結ぶ海—』九州大学歴史講座事務局、1991年11月  
孔子の「道」、老莊の「道」 君子の「道」のみでは、閉塞の時代を切り拓けない—プレジデント、30—11、  
1992年11月

医療の「技」と「道」 大分県医学会雑誌、10-1、1991年

道教と日本の宗教思想上・下 中外日報、1992年5月12日23日

中国古代の生命の哲学 I ツムラ創業100周年記念国際漢方シンポジウム 1993 プログラムおよび抄録、  
ツムラ、1993年4月

犀水先生の書と人と風土 青草、1993年10月号

保健ということ「生命」と「元気」の中国哲学—第二回全国学校保健・学校医大会誌、日本医師会、  
1993年

川嶋真人『医は不仁の術 務めて仁をなさんと欲す』はしがき 西日本臨床医学研究所、1996年3月

千利休『遺偈』の訓み方 中国学の一研究者として 『利休—茶のすがたとところ—』淡交社（『淡交』  
別冊、29）、1999年

福澤さんの「独立自尊」 大分合同新聞、1999年10月4日

『中津藩蘭学の光芒』の出版に寄せて 西日本臨床医学研究所、2001年3月

## 2、蔵書整理までの経緯

2001年12月福永先生が亡くなられた。その後、奥様の啓子さんも相次いでこの世を去った。

2005年、遺族より福永先生の蔵書約2万冊（以下「福永蔵書」と称す）と生前中津で暮らしていた家屋が中津市に寄贈された。家屋自体は、現在内部の改築を行って福祉施設「ややま園」の「福永分場」（15名の作業所）として活用されている。福永蔵書は中津市教育委員会に寄贈された。しかし、当初から書物の保管と整理に困難があった。

まず、市立小幡図書館はすでに書物でいっぱい、いきなり2万冊余の書物を置くスペースが無かった。また寄贈された図書は、福永先生が生前使用する便宜を図って、或る程度まとめて本棚に置いていたものの、特に分類などはしていなかった。その蔵書にはどのようなものがあるのか、どのぐらいの価値があるのかは、全く分からない状態にあった。しかも、その中には漢籍、中国語の書が多数あり、また書物以外の写真アルバム（訪中記念など）、書簡、ノート、カード、抜き刷り、ビデオテープ、文献複写フィルム、地図などがたくさん含まれていた。

もちろん、福永先生は中国思想史の研究者であったので、その蔵書は専門性が高いと推測できる。中津市は福沢諭吉をはじめ、著名人を輩出していたが、市内には中国学、特に思想史研究方面に深い学識を持つ人材もすぐには見当たらず、専門性の高い福永蔵書をどのように整理するか問題に突き当たっていた。

2005年4月11日、大分県文化財保存協議会は新しく合併発足した新中津市に文化財保護の申し入れを行うため、同会の会長神戸輝夫が新貝正勝中津市長、影木荘一郎教育長と面談した。同席した中津地方文化財協議会長中尾七平氏から福永蔵書整理のことが出され、福永先生と同じく京都大学（東洋史学専攻）出身の神戸輝夫は蔵書整理を引き受ける用意があると返答し、歴史民俗資料館倉庫に保存してある蔵書の状態を検分した。その後中津市教育委員会と神戸輝夫との間で蔵書整理にかかる委託事業について打ち合わせを行った。2006年7月27日中津市教育委員会と神戸輝夫との間に、「福永光司資料整理委託業務」に関する契約が行われ、福永蔵書の整理が具体化した。神戸輝夫は、蔵書整理のために大分県立芸術文化短期大学助教授で、福永光司先生の専門に極めて近い中国哲学史研究者の鄧紅氏に共同作業を依頼した。さらに鄧紅氏は、図書分類の専門家である大分県立芸術文化短期大学図書館の司書秦みつよ氏（高知大学人文学部歴史専攻卒業）に応援を要請した。

このようにして福永蔵書の整理は、神戸、鄧、秦の三人体制で発足したのである。この三名は大分市から片道約70キロの中津市に通い、学生等の支援を得て先ず蔵書整理を行い、その後蔵書目録作りを行った。

### 3、福永蔵書の分類

福永蔵書は2005年中津市教育委員会に寄贈された当初、適当な置き場所がなかったので、とりあえず歴史民俗資料館のプレハブ倉庫に収納された。2005年4月神戸輝夫が保存状況を見たが、プレハブ倉庫は通気性が悪く、漢籍などは現状での長期保管は湿気、虫食い被害など憂慮される状態にあった。

上記三人による蔵書整理の方針が決まった段階の2006年7月28日、段ボール箱に入れられた福永蔵書と書架は中津市立南部小学校の3階の未使用の二つの教室に移された。段ボール箱入りの書物は、福永邸に置かれていた状況で書架に並べられたが、日本語書物、中国語書物、漢籍、洋書などが入り乱れていた。したがって本の整理はまず分類から始まった。真夏の教室での作業は耐え難い肉体作業の連続であった。

まず、中国語の書籍（漢籍等含む）、洋書はA教室に運び、次のように大まかに分類し、並べた。

中国語の蔵書：

総目（辞典、目録 索引類）、叢書（国学基本図書・四部叢刊）、中国哲学、道家・道教、佛教、東洋史、考古学、地理、民俗学、美術史・絵画・書法、中国文学

漢籍：

経、史、集、叢書、和書線装本

洋書

日本語の蔵書（基本的に日本十進法分類表に準拠）はB教室に運び、次のように大まかに分類した。

総目（辞典、索引類）、全集、哲学、日本思想、中国思想、中国古典、神道、仏教、日本史・考古学、郷土史、中国史、中国文化、アジア史、韓国史、世界史、地理、政治、法律、教育、日本文化・民俗学・人類学、自然科学、心理学、医学、美術、語学、日本文学、中国文学、西洋文学、各種新書本、各種文庫本、逐次刊行物

これらの分類項目に従って、本棚の一寸一寸につき分類する書物を指定し、本の数も確認して、分類項目を本棚の上に明記しておくことにした。また各種雑多な雑誌類等は廊下にダンボール箱にまとめて、「中国語出版」と「日本語出版」のものにと分類した。なお、大学便覧、名簿類、原稿、校正刷り、アルバム類、テープ類、書簡類、各研究者からの抜刷、非公開出版物および文房用具などは、一応チェックした上で、家族（福永拙氏）の同意を得て廃棄処分にする方針を作り、最終的判断を教育委員会に委ねることとした。

### 4、目録の作成

整理、分類が終わって、書名等をパソコンに入力する福永蔵書目録の作成に取り組んだ。とりあえず、目録作成の原則を次のように定めた。

1、目録は次の5項目をワード文書で入力すること。

A、書名；B、著者（編著者、訳者など）；C、出版社；D、出版年；E、サイズ（cm）

2、漢籍類は、中国古典の四庫全書分類法に従い、経、子、史、集、叢書に分類し、旧字体を使用した。

3、中国語書籍の書名の漢字（簡体字）は、将来目録の印刷を考えて、すべて日本漢字に統一した。

なお、目録の作成に当たって、大分県立芸術文化短期大学国際文化学科2006年度「中国文化研究」卒業ゼミの学生に応援を求め、石井美登里、梶原舞子、柴田明日香、徳丸吉枝、楯原真琴五人の承諾をえた。そして「福永蔵書目録」の作成を彼女たちの卒業研究とすることにした。また神戸輝夫作業のアシスタントとして「歴史と自然を学ぶ会」会員平出淑江氏の助力を得た。

中国語の書籍は神戸輝夫、鄧紅、秦みつよが分類を行ったが、中国語書は日本の図書館では見られないものが多いと考え、その部分の入力は手作業で行った。つまり、一冊一冊の本を開いて、その書名、著者（編著者、訳者など）、出版社、出版年を確認し、本のサイズを測ってから、パソコンに入力した。漢籍は京都大学人文科学研究所漢籍目録に準拠して、神戸輝夫、平出淑江が分類作業を行い、神戸輝夫が入力を行った。

日本語書籍は当初手作業により鄧紅、学生が分類を行い、次いで入力作業に入ったが、あまりにも書籍が多く入力作業に手間がかかり、スピードが遅いので、他の方法に拠る作業方法を考えた末、最新の入力方法を開発した。その方法は、次の通りである。

1. 本棚に置いてある書籍をもう一度きれいに揃えて並べ、背表紙が見えるようにする。
2. デジタルカメラで一棚一棚毎に撮影する。
3. それらのデータ（写真）を大分に持ち帰って、パソコンで再現する。
4. 国立国会図書館のホームページを開いて、一冊一冊の本の書名、あるいは著者名を、国立国会図書館蔵書検索・申込システムNDL-OPACに入力すると、その本に関するデータが全部出てくる。その中の必要なデータをコピーして、目録に貼り付ける。もちろん、写真で写せないものがあるし不鮮明なものもある。それらをもう一度現場に行き、確認を行い手作業で入力する。
5. 最後に、入力したデータを現場に持ち込み、現物と照合する。

多数の新書、文庫本は秦みつよが分類し、入力を行った。分類に当たっては岩波書店文庫目録など、各書店発行の新書・文庫本目録によって一冊ずつ確認をした。

以上の作業を2006年8月初めの真夏の時期から開始し、正月を挟んで2007年1月末に総ての書物の入力を済ませ、その後2月末までにパソコン内の全書物データの編集作業を及び廊下に並べた書物以外の物品の整理を終えた。蔵書データの最終編集、印刷は大分県立芸術文化短期大学中国学研究室（鄧紅研究室）において行った。

半年余りの目録作業において南部小学校の教職員の皆さんや、教育委員会の職員の皆さんの温かい支援があった。ここに記して感謝いたします。

大分県文化財保存協議会会長、大分大学名誉教授 神戸輝夫  
大分県立芸術文化短期大学助教授、中国哲学史研究者 鄧紅  
大分県立芸術文化短期大学図書館司書 秦みつよ